

## 講演会「動物を絶滅から救うことの意味」

講師/林 良博さん（山階鳥類研究所長、国立科学博物館長）

2013年10月19日（土） 会場/千葉県手賀沼親水広場 研修室

地球の生き物は、哺乳類など脊椎動物や昆虫など無脊椎動物さらに植物に至るまで、かつてないほど広範囲に絶滅の危機に直面しているが、これはほぼ完全に人間の活動の結果である。鳥類は人目につき易い動物であるために、大きな環境変化だけでなく微少な環境の変化までも、人々に知らしめる指標動物になり得る。

人間活動によらない鳥類の自然絶滅は、100年に1種未満であるが、現在は少なく見積もっても50倍に速まっており、鳥類全体の12.5%にあたる1200以上の種が絶滅の危機にある。残念ながら絶滅してしまった巨大な鳥類であるドードーやエピオルニスが存在していたならば、どれほど多くの子どもたちが生き物の多様性を理解するのに貢献したのか計り知れないものがある。わたしたちは生き物のためだけでなく、未来の子どもたちのためにも、これ以上の絶滅を回避したい。

## 報告「カモから見た手賀沼 ～手賀沼のカモが減少したのは何故なのか～」

講師/間野 吉幸さん（我孫子野鳥を守る会 会長）

半世紀前までの手賀沼は水鳥の宝庫と言われていた。現在の手賀沼の水鳥は、その面影は全く無くなってしまった。手賀沼の水鳥の年総個体数は34年前に比べ約1/3に減少、中でもカモ科の減少は更に大幅に大きく約1/5になってしまった。

手賀沼の水鳥で最大の勢力群である代表的カモの動向を、食性別生息区分の視点から分析した。手賀沼とその周辺環境は、カモが生息できる生態系が崩れ、多くのカモを養えないことが見えて来た。如何にしたら沢山のカモが棲める美しく豊かな手賀沼に出来るか、皆様と共に考えて行きたい。

## 次第

	総合司会	我孫子市消費者の会	加藤 マリ子さん
	講演コーディネーター	公益財団法人 山階鳥類研究所	平岡 考さん
13:30	主催者挨拶	手賀沼流域フォーラム実行委員会 委員長 手賀沼水環境保全協議会 事務局長	八鍬 雅子 大竹 毅 (千葉県環境生活部水質保全課長)
13:35	来賓紹介		
13:40	講演「動物を絶滅から救うことの意味」		
15:10	質疑応答		
15:25	休憩		
15:35	報告「カモから見た手賀沼 ～手賀沼のカモが減少したのは何故なのか～」		
16:15	質疑応答		
16:30	閉会の挨拶	手賀沼流域フォーラム実行委員会 副実行委員長	中野 一宇

## 講師 紹介

山階鳥類研究所 所長・国立科学博物館 館長

### 林 良博 さん



#### ●プロフィール

1946 年広島県に生まれ、富山県育ち。

東京大学大学院農学系研究科獣医学博士課程修了（農学博士）

東京大学 助手、助教授、ハーバード大学客員研究員、コーネル大学客員助教授などを経て、1990 年東京大学教授。その後同大学総合研究博物館長（併任）、農学部長、副学長を歴任。2010年東京農業大学教授（～2013 年3 月）、山階鳥類研究所所長を兼任。2013 年に国立科学博物館館長就任、現在に至る。

著書は専門書のほかに「絶滅危機動物図鑑」、「鳥の絶滅危惧種図鑑」、「ふるさと資源の再発見」、「ヒトと動物」、「検証アニマルセラピー」、「イラストでみる犬学」、「動物たちの反乱」等。

## 講師 紹介

我孫子野鳥を守る会 会長 間野 吉幸 さん



#### ●プロフィール

我孫子野鳥を守る会会長、我孫子市環境レンジャー運営委員長、

美しい手賀沼を愛する市民の連合会副会長。地元の環境に関心を持ち、環境関連分野で活動中。

我孫子野鳥を守る会では、発足当時から毎月実施している「手賀沼定例探鳥会」、「手賀沼の水鳥の種類と個体数の調査」、および、会員から寄せられる「鳥だより」などの手賀沼周辺の鳥の記録の集積を継続して行っている。これらのデータをもとに、以下の報告書を刊行した。

①手賀沼の鳥－20 年の観察記録（1994 年）

②手賀沼の鳥Ⅱ－30 年間の変遷（2004 年）

③手賀沼の鳥Ⅲ－食性別生息区分から見た水鳥の変遷（2012 年）

手賀沼ガイドブック「四季の手賀沼周辺散歩～野鳥と草木と風景と～」（2012 年）

## 全体会の様子



## 講演会 「動物を絶滅から救うことの意味」

講師/林 良博さん (山階鳥類研究所長、国立科学博物館長)

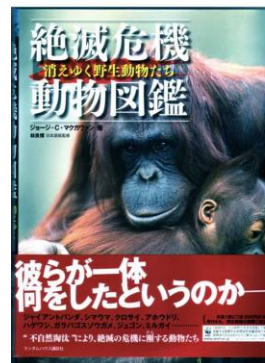
こんにちは、林です。3年前から山階の所長を拝命し今年4月からは国立科学博物館の館長も勤めさせて頂いています。今日は「動物を絶滅から救うことの意味」という題でお話させて頂きたいと思います。

私は動物の解剖学が専門で、いちばん多く解剖したのは哺乳類、研究対象にした中に南氷洋のミンククジラもいます。大学卒業後、研究者になり病害動物研究施設という東京大学の附属施設に赴任し、5年間ほど奄美大島にいました。当時、ハブの被害がピークに達していて、奄美大島と徳之島、2つの島で年間330人位の人がハブに噛まれていました。WHOの統計でも「世界で最も危険な地域」でした。統計はベースを理解する必要があります。私が調査したスリランカでは交通事故より毒ヘビに噛まれて死ぬ人が多い。しかし、統計が日本ほど取られておらず、一見、問題がないように見えます。一方、日本の様に統計が取られていると、かえって「危険な国」になり、「日本は非常に毒ヘビの多い恐ろしい国」ということになったりします。勿論そんなことはありません。5年間に被害者が半分以下になったのは嬉しかったです。現在は両島あわせて50人位までに減りました。

専門は哺乳類が中心ですが、爬虫類ではハブが、鳥類ではニワトリが得意です。赤色野鶏が東南アジアに広く分布していますが、これがどのようにして現在のニワトリになったか、その生物学的な理由をライフワークにしています。秋篠宮文仁親王殿下のご研究のお手伝いとして取り組んでいます。もしニワトリを家禽化できなかつたら、かなり悲惨なことになっていたと思います。1キロの肉を得るのに、大体2~3キロのトウモロコシが要ります。これが豚だと4~5キロのエサが必要で、牛肉、特に日本で好まれる霜降りの牛肉だと7~10キロを必要とします。71億人を越えた世界人口を考えると、本当はこれ以上農地を広げるわけにはいかないのです。野生生物のすみかである森林や沼などを開発して農地にしなければ、人は飢えてしまいます。たくさんの肉を食べれば食べるほど、その被害が大きくなる。ニワトリが一番少ない穀物で環境に優しい肉を提供してくれているのです。

### レッドリストにない絶滅危惧種も、大事なのは想像力を働かせること

この4~5年の間に、私は2つの大きな図鑑を監修しました。ひとつは『絶滅危機動物図鑑』で、3年前に講談社から翻訳・出版されたものです。哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、昆虫類など、様々な専門家が一緒に作った図鑑ですが、副題には「彼らが一体何をしたのか」と書かれています。野生動物たちは多くの場合、犠牲者でしかありません。世界で年間100万人の人が毒ヘビに噛まれ5万人が亡くなっています。可哀想ですが、毒ヘビは駆除しなければなりません。多くの動物たちは何もしていな



いの、絶滅の一途を辿っています。もうひとつは今年 10 月出版された『鳥の絶滅危惧種図鑑』で、今日はこれを下にお話を進めさせていただきます。

絶滅危惧種というと、レッドリストがあります。世界的なレッドリストは I U C N (International Union for Conservation of Nature、国際自然保護連合) が出しています。世界の絶滅危惧種の現状と原因を取りまとめたもので、日本には環境省のレッドリストがあります。気をつけてほしいのは、レッドリストに載っている種だけが絶滅にさらされているのではないということです。哺乳類 5488 種のうち 1141 種、21%、鳥類の 9990 種のうち 1222 種、12%が絶滅危惧種として記載されています。また、爬虫類は 1385 種のうち 423 種、31%、両生類は 6260 種のうち 1905 種、30%、魚類は 3481 種のうち 1275 種、37%です。

しかし、実際は爬虫類でこれまで発見された種は 8734 種あります。両生類で 6347 種、魚類はその 8~9 倍に当たる 30700 種もあります。レッドリストでは、爬虫類なら 1385 種しか調べてなくて、その 30%に当たる 423 種が危ないといっている。では、残りの 7000 種は分からない、情報がないのです。これだけしか絶滅が危惧される種がないということでは決してありません。

特に今注目されているのは、爬虫類と両生類です。例えば、カエルを思い浮かべて下さい。非常に皮膚が薄そうですね。カエルは水の中でいろいろな物質をやりとりするから、皮膚が薄いのです。その分だけ、カエルは紫外線に弱いわけです。オーストラリアのある地域でカエルがあつという間にいなくなり、多くの研究者はオーストラリアにはオゾンホールがあり、紫外線が強くなったためだろうと推測しています。水質が汚れたときに一番被害を受けるのが両生類です。両生類の被害は世界的で、絶滅の速度は想像を絶するものがあります。1日に絶滅する動物・植物は毎日 100 種以上！この瞬間にもどんどん絶滅しています。また、人類がホモサピエンスになったのは 20~30 万年前ですが、それ以降、鳥の絶滅スピードは 50 倍になったと言われます。何もなくても絶滅は起きます。自然界が変遷する中で、どうしても生き残れないものが 100 年に 1 種、200 年に 1 種位出していた。それが 50 倍になりました。100 年後には 500 倍になると言われています。

その主たる原因は、野生動植物が生息する森林、原野、沼などがかつての姿ではなくなってきていることです。特に、大きい渡りをする鳥などは、ひとつの国だけで守っても守りきれません。今、南の開発が急速に進んでおり、危惧されています。絶滅危惧種は本当に氷山の一角で、私たちには勿論、科学的データや情報も必要ですが、もっと必要なのは想像力を働かせることです。私たちのもつ情報がこれだけなら、本当はどうなっているのか、ぜひ想像力を働かせて頂きたいと思います。

## 今は第 6 回目の大量絶滅、それは人間がもたらした

自然界が変わると絶滅は起きるし、新しい生き物も誕生しています。しかし、そういう絶滅ではない大量絶滅を、これまで地球は 5 回経験しています。一番有名なのは第 4 の大量絶滅となった恐竜の絶滅でしょう。色々な説がありますが、大きな隕石がぶつかり、地球全体が灰に覆われて気温低下が起き、植物が枯れ、生き物の 90 数%が絶滅したのではないかとされています。

私たちは宇宙の中に生きていて、この地球もいつ無くなるかしのれない。4~5 億年は大丈夫と言われていますが、自然の力にはそういう恐ろしいところもあります。しかし、現在起きている第 6 の大量絶滅は、大部分は人間の活動によるものと考えられています。ついこの間、I P C C (Intergovernmental Panel on Climate Change、気候変動に関する政府間パネル) が第 5 次の報告書を出しています。

これはアオコンゴウインコの写真で非常にかわいらしい鳥です。遺伝的多様性が非常に少なく、絶滅が心配されています。個体数がある程度以下になると、交配が上手くいかず、絶滅してしまうことがあります。今のところ飼育下では大丈夫ですが、野生状態ですでに絶滅している可能性が非常に高いと考えられています。

絶滅を確認するのは難しいことです。つい最近もネパールで、絶滅したと言われていたチョウが再発見されました。

日本でも、「ニホンオオカミは絶滅していない」と活動している日本オオカミ協会の方もいますし、カワウソも絶滅宣言を出すのを10年以上ためらっていた経緯があります。絶滅と言いたくないんです。グアム島にもクイナがいました。アメリカ軍がパプアニューギニアから持ち込んだ木材と一緒に、ミナミオオガシラヘビが入りました。毒ヘビではなく、アオダイショウのように家に入るのが好きなヘビです。このヘビによってグアムクイナだけでなく、4種類の野鳥が絶滅しています。木に登って卵を食べる。これが大きな原因でした。

絶滅が心配される絶滅危惧種1Aの鳥類に対して、何が一番脅威かという外來種、中でも哺乳類です。沖縄のマングースもヤンバルクイナの最大の敵です。次は植物です。植生がガラリと変わると、鳥が絶滅してしまう。病原体も勿論脅威です。これはアメリカ東北部の写真で、鳥の巣を襲撃するブラックラットスネークです。鳥の巣は大変なご馳走の宝庫ですし、ヘビは木に登るのが得意ですから、当然、木に登って巣を襲います。



### 新種記載に始まり、山階鳥研がヤンバルクイナに貢献したこと

ヤンバルクイナの強敵マングースも人間が持ち込みました。ヤンバルクイナについて山階鳥類研究所がどういう貢献したか、ちょっと宣伝させてください。1981年、山階鳥類研究所創設者の山階芳麿先生がヤンバルクイナ新種記載をしました。よく新聞などで「山階鳥類研究所がヤンバルクイナを発見した」という記事になりますがそうではありません。沖縄の人は昔から知っていて、「アガチ」という名前をつけていました。アガチとは「がしゃがしゃ動き回る」という意味らしいです。本当は沖縄の方言を大切に、その名の方が良かったのではないかと、秋篠宮殿下はおっしゃっています。ただ、ヤンバルクイナという名前によって、山原（やんばる）の宣伝にはなったのではないかと思います。これも沖縄の方言です。



山階鳥類研究所の貢献

- ・ ヤンバルクイナの新種記載
- ・ ヤンバルクイナの生態研究

新種発見時の写真

発信機を付けたヤンバルクイナ

- 1981: 捕獲成功、新種として記載 (山階研)
- 2000: 生息域の減少判明 (山階研・沖縄原の調査)
- 2002: マングースが主要因と判明 (山階研)
- 2006: 環境省レッドリストで絶滅危惧1A種指定
- 2007: 人工繁殖計画策定 (環境省)

学術的な新種記載は研究としては大きな功績です。2000年になると生息域はどんどん減り、ヤンバルクイナは北に追い詰められていきます。これはマングースの北

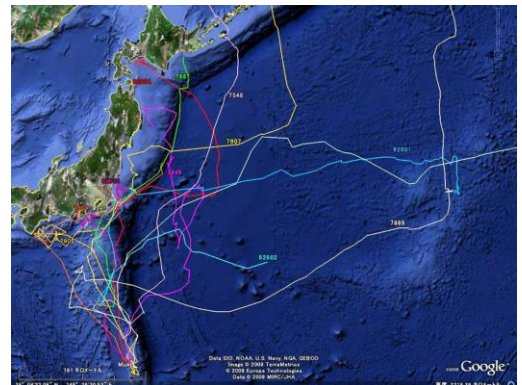
への進出と重なっています。山階鳥類研究所は沖縄県と調査し、「マングースが主要因ではないか」と発表しました。これも大きな功績だろうと思います。2006年、環境省のレッドリスト絶滅危惧種 I Aに指定され、2007年には人工繁殖計画が環境省の下で策定されました。

ヤンバルクイナは飛べないので無理としても、「鳥は飛べるからどこでも行けるではないか」と、皆さん思われるかもしれませんが、そうではありません。太平洋を股にかけて飛び回るアホウドリですら、ひとつの島で絶滅することは大変な問題です。そのことをぜひご記憶頂きたいです。山階鳥類研究所はアホウドリを鳥島から聳島に移住させる計画を開始しています。この写真で研究員が抱えているのはデコイと呼ばれる模型です。多くの鳥はこういう模型が好きで、生きていなくても、落ち着くようです。山階が調査した個体の中にも、デコイが本当に好きになって、7年間も離れなかった個体があって「デコちゃん」と呼ばれていました。

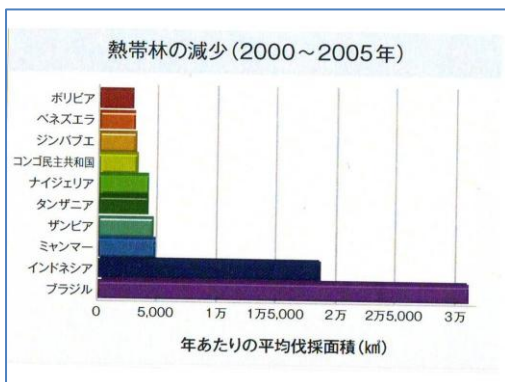


山階鳥類研究所のアホウドリ移住作戦

移住先はどの島でもいいだろうと思われるかもしれませんが、そんなことはありません。鳥にとってはどんなに環境が悪くても、住み慣れた鳥島は生き残った場所なんです。羽毛を取るために500万羽殺されたと言われ、日本では絶滅したと思われていました。実際、急斜面の非常に条件の不利な場所で、ヒナが孵っても転げ落ちてしまうような崖ですら離れたくないんです。それをどうにか移住させようというとき、移住先の島を安全だと思ってもらう一番いい道具はデコイです。見事に成功し、鳥島、聳島に移住させましたが、発信機をつけたら、太平洋を広く飛び回っていることが衛星で追跡されています。数もどんどん増えています。



## 大量絶滅の大きな原因、熱帯雨林の減少をどう止めるか



人間の圧力によって生き物は大量に絶滅していますが、いちばん大きな原因は熱帯雨林の減少と考えられます。アマゾンの開発は凄まじく、ブラジルでは年当たりの伐採面積は3万平方キロメートルとも言われ物凄い面積です。続いて減少が著しいのはインドネシア、西から東へ5000キロの生物多様性が高い大きな国です。ボルネオ島のカリマン

タン地域には大きな熱帯雨林があり、ここで伐採が急激に進み、伐採した後にアブラヤシを植えています。この影響も大きいです。

ペルーではアマゾンで違法に捕獲されたキンバネミドリインコを、マーケットで販売していました。檻の中でこ



ペルーのイキトス市場では、アマゾンの熱帯雨林で違法に捕獲されたキンバネミドリインコが売られている

んなに密度が高いと死んでしまうのではないか。それくらい、劣悪な環境で売っています。

この方は米国のトーマス・E・ラブジョイ博士です。ラブとジョイが両方あってとてもいい名前だと、ご自分でもおっしゃっています。生物多様性という言葉はこの方が作った言葉です。彼は鳥類学者です。研究者達は調査し色々な試みをしています。彼が考えたのは、あらゆる研究者の協力を得て、論文を集約することでした。生物多様性を実現しようと思ったら、特定の動物学者だけではだめですね。ですから、植物学者、動物学者……動物でも哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、さらに、色々な昆虫の研究者、その人たちと協力して500の論文をまとめました。そして、生物多様性に伐採がどんな影響を与えているかということを発表しました。当然、開発を推進する人たちから見たら敵で、物凄い嫌がらせも受けて大変苦労されている人です。

ブループラネット賞は日本の公益財団法人旭硝子財団が出しており、環境分野のノーベル賞と言われ、5000万円の副賞は金額の大きさから見てもノーベル賞の次に大きな賞です。私はこの賞の選考委員長をしています。

2012年はリオデジャネイロで20年前にスタートした生物多様性保全プログラムの20年目に当たり、地球温暖化からどうやって生物多様性を保全するかを議論する予定でしたが、開催時期の5月は世界経済がメチャクチャだし、日本も原発問題でそれどころじゃないという時期で、意気の上がない会議になりました。もう一組の受賞者は、エコロジカル・フットプリントを提唱したウィリアム・E・リース教授（カナダ）とマティス・ワケナゲル博士（スイス）のチームでした。これは、私たちがどれだけ大きな足で大地を踏みつけているかを視覚化する考え方です。この方法で見ると、今や人類は地球2.3個分の土地を踏みつけています。地球は1個しかないのだから、あと1.3個分はどうなっているのか。私たちはどんどん環境を劣悪化させているわけです。

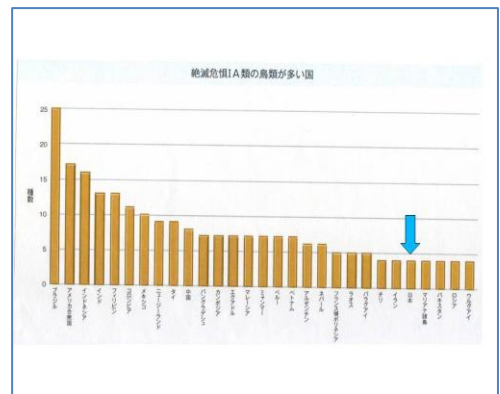
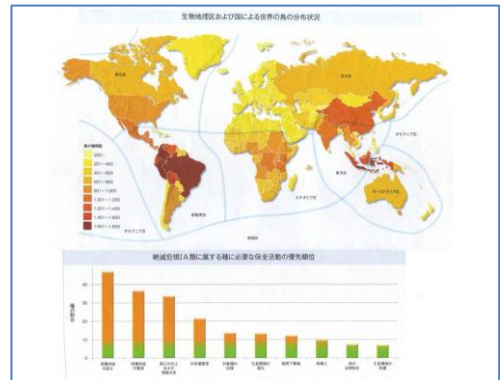
この図は世界の鳥の分布状況ですが、やはりブラジル・インドネシア・ボルネオ島などの熱帯雨林が種数の多い場所となっています。森林伐採はそういうところが特にスピードで行われることが分かっています。絶滅危惧IAの鳥類が多い国を見ると、やはりブラジルやインドネシアが上位にあります。米国は2位ですが、かつてリョコウバトを2億～3億羽絶滅させた過去があり、今一生懸命保全活動やっています。ただ、米国には保全に熱心な人と、シェールガスでも何でもどんどんやれという人の両方がいて、色々な意見のある国です。

日本はこの地図で見ると種数が少ないように見えます

2012年度ブループラネット受賞者のラブジョイ博士は、アマゾンの生物多様性調査の責任者



本年度受賞者のラブジョイ博士と握手する林選考委員長



△ このシロカフオトリ (Northern Gannet) はナイロン製の網に絡まって死亡した、漁業による悲しい被害者である。英国ドーセットのチェルシービーチにて。

が、世界全体で見るとやはり非常に絶滅の危惧が高い国で、私たちのやることはいっぱいあると思います。

例えば、このシロカツオドリは漁網に引っかかって死んでいます。今、漁業も「生き物に優しい漁業に」と言われ、研究者が色々研究開発をしています、今後は更にこういうことに注意を払う必要があります。

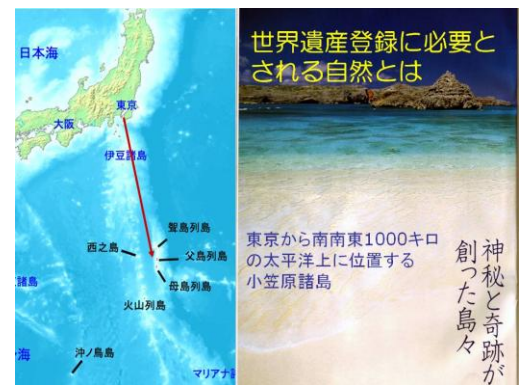
## 生息域内保全と並行して、生息域外保全を実施する

何ととっても一番いいのは、生き物たちが最低限生きられる森林を保全すること、つまり、生息域内保全ですが、すでに生息域が失われて元に戻せない、あるいは数が減りすぎて独力では絶滅を免れないといった場合には、人間が力を貸すことも必要です。遺伝的多様性を増やす方向での交配計画を立て、動物園などの施設で保全したものを生息域内に戻す、つまり、生息域外保全と両方が必要なのが現状ではないかと思えます。

カリフォルニアコンドルも生息域外保全の例です。野生個体が殆どゼロに近づいた段階でやっと、生息域外保全が始められています。動物園の飼育施設でどんどん増やし、今は野生個体とほぼ同じ数になっています。両方あわせて300羽を超えた位でしょうか。これはサンディエゴにあるワイルドアニマルパークでの生息域外保全の様子です。未発達のヒナの口にエサを与えるため、親に似せた手袋人形を使って給餌しています。何としてもヒナを育てようとしている人たちの努力に大変素晴らしいものがあるなと思えます。



もう一つの例です。世界遺産登録された小笠原諸島ですが、生物多様性が損なわれると世界遺産登録されない、あるいは取り消されるというので、アカガシラカラスバトの保全が行われています。何とか生息域で保全すると同時に、多摩動物公園などで生息域外保全されています。この位まで減ってしまうと、生息地と動物園などの飼育施設の両方で増やすことが必要になるんですね。



小笠原は日本列島と繋がっていたことのない全く別の島です。南西諸島はもともと大陸にくっついてたのが離れたのですが、小笠原はもともと離れた島でした。このカツオドリは翼を広げると2メートル超える大きな鳥で、小笠原独自の大切な固有種です。ところが、普通のネコが持ち込まれて野生化し、カツオドリに一撃で致命傷を与えてしまいます。こういうものがある限り、世界遺産登録しないという意見もあり、東京都が捕獲に乗り出しました。本来なら殺処分ですが、東京都獣医師会と東京都が組み、小笠原丸で東京の動物病院に運んでいます、これが実現するまで2年位かかりました。ネコの愛好家のみなさんが「カツオドリはネコに殺されたのではないのではないか」というので、専門のカメラマンが夜、長時間にわたって自動撮影装置を仕掛け、それで決定的瞬間を撮りました。今でも「ネコを捕獲するなんてかわいそう」という話がある位です。ですから、「捕まえても殺すな」という声が出て、野良ネコが家ネコになり、これはこれでハッピーですが、それじゃ、沖縄で今捕殺されているマングースはどうなんですか。こんな声は聞こえてきません。マングース助



けるなんて誰も言わない。人間って相当……勝手な動物ですね。マンガースだって好きで来たわけじゃないですからね。

東大の渡瀬庄三郎という先生が沖縄県民の為にセイロンから持ち込んだ 12 頭のマンガースが出发点です。最初に持ち込まれた時は、沖縄県庁でマンガースとハブの決闘をやりマンガースがハブに噛みついて殺したのを見て 100 人位の人が万歳三唱したそうです。10 年位たち、どの位役に立っているか調べたら、マンガースの胃袋からハブが出ず、ハブが減ったという証拠も挙がらず、結局、沖縄固有種のヤンバルクイナを殺すために入れたようなことになりました。沖縄固有の飛べない鳥をマンガースは殺すなんて誰も思っていない。マンガースに言わせれば勝手に連れて来られ、捕獲されて殺される。いったいどういうこっちゃと言いたくなると思います。

### 養蚕、疎水、ため池も 深刻な「絶滅危惧種」

もうひとつ申し上げたいことがあります。私はある養蚕関係の委員会の委員長をしていますが、桑畑はかつて農地の 10 パーセントを超えていました。今、耕作放棄地と言われている大部分は桑畑だと思います。一番多かった時は日本で 200 万の農家がお蚕さんを飼っていました。私は広島県山県郡出身ですが、昔はちょっと山のほうに行くと大抵の家で蚕を飼っていて、ガサガサと音を立てて桑を食っている幼虫、お蚕を見ているわけです。あの頃の子どもたちはよっぽど自然に親しみ、家の中に自然があったんです。それが去年は 600 まで減ってしまいました。それで農水省にお願いし、何とか日本古来のこの産業を復興させようとしています。日本がこんなに豊かになったのは生糸をたくさん売ったからです。今はブラジルと中国が二大産地で、日本に比べたら圧倒的に安い。ですから、日本の養蚕農家の製品には倍以上の値段をつけるシステムを作ろうとしています。消費者調査によると、純日本産の蚕からとった生糸で織った織物なら倍の値段でも買うというお金持ちの人がいます。プログラムが始まり、期待していますが、手厚い保護というのはなかなか難しいですね。

それから疎水。稲作以来、日本人が作り続けてきた農業用水、メダカが泳ぐ人工の川ですが、全長 40 万キロメートル、地球 10 周分が現在、日本の国内にあります。これが管理する人がいなくなり、崩壊寸前です。

それからため池。日本で一番雨が少ない香川県は「うどん県」と言われていますが、米は雨が少なくは作れませんが、小麦は作れるから作ってきたのだと言います。だけど、何としてもお米が食べたい。だから、あちこちにため池を作りました。これが西日本を中心に 21 万個あります。このため池が今、管理する人がなくなってしまった。これどうするんでしょう。日本全体がきびしい状態にあります。

### 1960 年の光景を 46 年で取り戻した豊岡、野田市でもコウノトリが誕生

日本人というのは生き物に対する温かい眼差しを持っていますね。農作業など山や浜で仕事をしている時、鳥やいろいろな生き物たちが近くにいるから、生き物に対する優しい眼差しが育つのでしょうか。

以前、手賀沼流域フォーラムで佐竹さんが講演されましたが、これは非常に有名な写真で、1960 年の豊岡の近くの風景で、



写真提供：富士光芸社

1960年8月 市内出石川

農作業の後、おばさんが但馬牛を洗いに来ているとき、コウノトリがこんなにたくさんいました。

絶滅というと、一番象徴的なのがこの写真です。コウノトリの巣の下で農薬をまいています。ただし、コウノトリ絶滅の原因を農薬にだけ押しつけてはいけません。いろいろな理由がありました。

そこで、中貝宗治という、コウノトリのことしか言わないんじゃないかという市長が中心となって、中国やロシアからコウノトリを貰い受けました。そして、29年後には国産のコウノトリが生まれ、2005年に私どもの総裁である秋篠宮両殿下が放鳥されました。



しかし、農薬散布など重なる視点で日本では、コウノトリは絶滅した。



見ていただきたいのはこの写真です。子どもたちが通学するところにコウノトリが来て、見送っています。色々な研究者から聞く限り、コウノトリという鳥は人の好きな鳥です。上野動物園の園長さんをされた増井光子さんも「林先生、コウノトリという鳥は人間の好きな鳥だねえ」とよく言っていました。頼まれもしないのに、子どもたちに「いってらっしゃい」と言っています。この光景を取り戻したいというのが中貝市長はじめ、豊岡で頑張られた方たちの共通の思いでした。この写真は2006年です。着ている洋服がハイカラですし、カラー写真ですが、1960年と同じ光景でしょう。1960年から2006年の46年後という非常に短い期間にこれを達成したのが、豊岡の素晴らしいところだと思います。

私たちの近くでも、野田市が多摩動物公園と提携してコウノトリの野生復帰を目指しています。このように、ちょっと小ぶりの生息域外保全の飼育場も作りました。

卵が4個生まれ、2羽がここまで成長しました。もう、親鳥のつがいと一緒にエサをついばむようになっていきます。来年、放鳥してくれないかなと思っています。野田市長はコウノトリが野田市にいてくれなくて結構だと言っています。関東全域を飛び回り、東北にも応援に行ってくれないかと言っている位です。



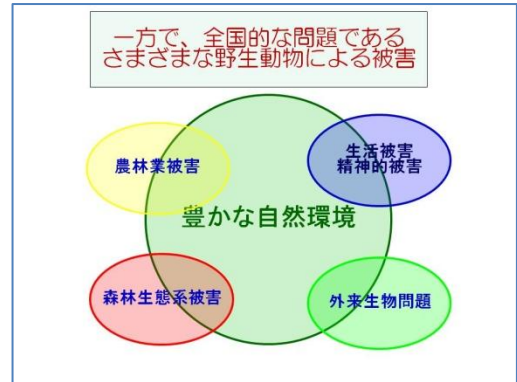
## 動物を絶滅から救う主体は、これからは市民団体

アホウドリの生息地、鳥島にも、もう少し条件のいいところはあります。しかし、同じ島内ですら、アホウドリは移りません。ですから、鳥島から鴛島への移住にあたっては、同じ鳥島の中でもまず急斜面から平たいところへデコイを使い移住させました。それから鴛島に移住させました。なぜ移住させなければならなかったかという、鳥島の生息条件はいいのですが、しょっちゅう噴火している島なので、全滅するかもしれません。動物が不器用な場合、このように人間が工夫して、やっと両者の共存ができるのではないかと思います。

問題は誰が希少種、絶滅危惧種の保全を担うかということです。本来的には国が担うべきものだと思いますが、こんなべらぼうな借金を抱える国も珍しく、私は地方自治体や国以外の民間 NGO が保全の主体となるべき時代がもう来ていると思います。それを国が支えるということです。

その意味では、私の後にお話しされる間野吉幸さん、我孫子野鳥を守る会の会長さんですが、そういう方たちがこれから中心になって頂かないと守れないのではないかと思います。国は予算を出さなくていいと言っているのではなく、無駄なところは省き、こういうところにお金を使って欲しいです。

最後にもうひとつ、複雑な問題をお話ししたいと思います。今、全国でいろいろな野生生物の被害が出ています。農林被害だけでなく、生活者の生活被害、精神被害、さらに、森林生態系全体が被害を受けて日本の野山がおかしくなるかもしれないという状況にあります。



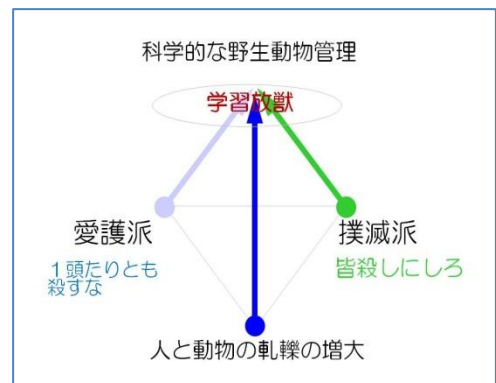
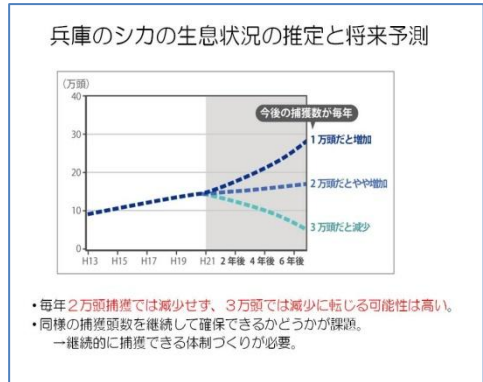
クマが民家の近くに来て、ここで生活している人は子どもを安心して学校にもやれません。サルは家に入って冷蔵庫をあける、洗濯物は盗む、畑の収穫物を盗られたりして、多くの人が怒っています。農業をやっている方は都会に住んでいる子や孫に野菜や果物を送ってやろうと作っていて、サルは収穫の前日に盗って行く。子や孫は滅多に来てくれないが、サルは毎日来てくれます。来ないと「子ども連れたあのサル、どうしたかな」と心配しているんですね。お役人には「どうしてくれるんだ。私たちは生活できない」と怒りますが、夜には「あのサル可愛いんだ。どうして来なかったんだろう」と。人間にはそういう二面性がありますね。両方とも真実だと思います。

しかし、私たちが特に問題にするのは生態系全体への影響です。これは京大の演習林で、2枚の写真は10年しか経っていませんが、笹がきれいに無くなっています。シカの仕業です。ちょっと見ると掃除されていて綺麗に見えますが、次に何が起こるかという、皮を剥いで木がなくなります。



兵庫県では年にシカを3万頭捕獲しないと減らないという推計があります。「一頭たりとも殺すな」という愛護派も、「皆殺しにしろ」という絶滅派もあり、なかなか両方を足して割るというようにはいきません。この2つは水と油で全く混ざりません。ですから、私は「科学的な野生動物管理が必要」と言っています。しかし、これに納得しない人は少なくありません。例えば、アライグマやマングースは人間が後から持ち込んだもので、自分で勝手に入ってきたわけじゃないのに、あまりに勝手だというわけです。

科学的な野生動物管理



## 生きものの絶滅を回避する活動は、持続的な未来をもたらす

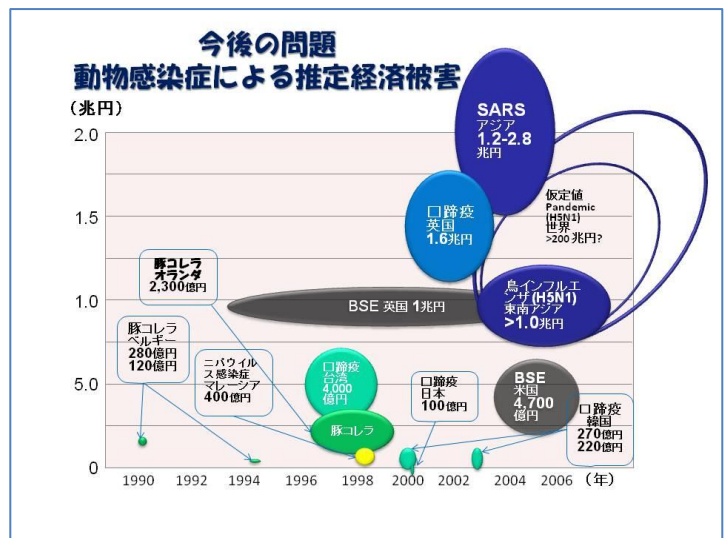
もう一つ賞の話をしてしますと、私は2006年に公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会が出しているコスモス国際賞のコーディネーターを務めさせて頂きましたが、この時の受賞者のインド科学研究所のラマン・スクマール博士は若い素晴らしい研究者で、30年位前のインドでは年間1000人以上がゾウに殺されていたが、今では250人くらいに減ったそうです。理由は緑の回廊作りと密造酒の廃止です。ゾウは時期によって移動します。緑の回廊があればいいんですが、あってもちょっと集落に寄り道することがあります。密造酒を作っていて匂いに惹かれてきて、窓をガーンと割り、鼻で密造酒を飲んでいく。それはオスゾウだそうです。人間もゾウも同じですねえ。だから、密造酒をつくるなら山の中、森の中で作れと言って、4分の1に減ったのだそうです。



しかし、それを理由にゾウが殺されることはないと言うんです。せいぜい1頭か2頭だと。日本ではこの間、全国でクマが5000頭近く殺されました。クマによる死亡者は一人か二人です。その話を彼に話したら、「クマを殺す必要があるの。日本人は短気なんじゃないの」と言われました。

タイも今野生動物に優しい国です。密猟者のワナにかかったゾウを麻酔銃で眠らせ、ワナを外します。国によって色々ですが、日本は日本のやり方でやればよいと思います。

頭の痛いことがいっぱいあります。動物感染症で今いちばん恐れているのはインフルエンザH5N1型です。研究者の予測によると、もし流行すれば世界的に経済被害が200兆円を超えと言われています。今のところ「野鳥を殺せ」という話にはなっていないですが、経済被害が大きくなったら、必ず出てくると思います。国民全体がヒステリーにならないことを私は期待しています。



難しい問題はたくさんありますが、重要なのは地道な活動をすることであり、行き過ぎた人間中心主義は直さなければなりません。象徴主義は、象徴になる動物にだけ注目が集まり、生態系全体を保全しようとする活動の障害になることがあるので、避ける必要があります。目立たない動物を保全する活動は重要です。

生き物の絶滅を回避する。そういう活動はすべての生きものに持続的な未来をもたらすのではないかと思います。

### 【質疑応答】

**Q.** 希少種の保全は地方自治体やNGOが主体になるということですが、生物多様性についての基本原則をどういう形で検討して行ったらいいのか、お考えを伺いたいと思います。

**A.** どうすれば保全できるかはまだまだこれからだと思います。2つヒントがあると思います。

まず、国が最大限の後押しをしますが、主体者として地方自治体があります。そのとき、生物多様性を守ると、納税者にはこんないいことがありますよと示すことが大事だと思います。「生態系と生物多様性の経済学 (The Economics and Biodiversity)」生物多様性を守ったらどんな経済効果があるかを調査する国際プロジェクトがあります。その責任者が、日本の事例を引き合いに出し、例えば、豊岡のコウノトリ米、佐渡のトキ米、そして、滋賀県の高島米です。高島はトキやコウノトリなどの象徴にとらわれず、いろんな生き物がいるから消費者にとって安心なお米ができますよという形でやっています。消費者は食べながら生物多様性に貢献するので、少し高くても買ってくれる。それがうまく行っている地域です。こういう運動がもっと進むと、「地方自治体がなぜ生物多様性の保全をやっていくか」ということについて、住人に説明責任を果たせると思います。生物多様性は地域の活性化に役立つということを、地方自治体の方はもっとおっしゃる必要があると思います。

民間の場合にはもうひとつ、やっている方が楽しくないと人は増えません。どうやって楽しさを出していくか。年間を通じて、生物多様性と絡んだ面白い活動をやって頂くことではないかと思えます。

この7月から国立科学博物館では深海の展示でダイオウイカが大ヒットしまして、本当に有難く、これを見てみたいという気持ちには尊いものがあると思います。やはり世界最大のクジラで、マッコウクジラと大喧嘩したり、小さな漁船を海に引きずり込んだり、大変なイカですが、それを見たいと北海道から沖縄までたくさんの方が来てくれました。これやっぱり楽しいからですね。

**Q.** 野田のコウノトリですが、先ほど象徴主義はいけないとおっしゃいました。象徴主義に陥らず効果的に生息するようにする条件・背景について伺いたいと思います。

**A.** 野田は豊岡と比べて安心できます。豊岡では急いでいたため、何から何まで同時にやらなければなりません。野田は根本市長がこれまで基盤作りをやってこられました。たんぼを買い上げてドジョウやカエルを復活させ、農地では殺虫剤を使わず黒酢をまいているようです。ただ、どうやったらコウノトリが手に入るのかで苦勞し、多摩動物公園の協力を得て、繁殖率の一番いいのが贈られすぐ交配して卵が産まれました。結論から言うと、私は基盤をきっちりやっているから野田は大丈夫だと思います。

**Q.** コウノトリをこの地に放鳥することについて疑問視しています。コウノトリは関東一円に飛び立っていくでしょう。例えば、柏市はまだラジコンで農薬の空中散布をしています。農業環境も変わっていかねばいけないと思います。それを無視してやるのは、コウノトリにとっては迷惑な話だと思いますが、どうお考えですか。

**A.** その論議は豊岡の時すらありました。豊岡のコウノトリは兵庫県に留まっているわけではありません。しかし、そこを言っていたのでは、こういうタイプの事業はいつまでもできません。

どういうやり方をするかはこれからだと思いますが、「野田市だけの事業ではない」と聞いています。29の市町村が集まった「コウノトリ・トキが舞う関東自治体フォーラム」としてやっているそうです。ここから始まって、どんどんあちこちにステーションを作っていくという話で、ここですべて決定されていくだろうと思います。心配はたしかにあります。他の所ではどの程度、生物多様性保全の基盤が整備されているか、環境省、文科省、農水省からも担当者に来ていただき、国全体としてどう支援するか、兵庫県としてどう対応するか話されたと聞いていますので、おそらくその例から学べるだろうと書かれています。